一　次の文章を読んで問いに答えよ。

文化と文化のあいだを問うことは、それほど単純ではないように思われる。とりわけ、実体的には存在しない文化を議論の俎上に載せようとするのであれば。

ある文化と別の文化を比較する際、たいていは相互に外在的な複数の文化を思い浮かべる。日本文化、アメリカ文化、イギリス文化、フランス文化、ドイツ文化、中国文化、韓国文化……といった具合に。これらのなかには自身が帰属する文化があり、その外に多種多様な別の文化が存在すると考えられている。(1)シュウチのとおり、あらゆる文化の外側に立ち、比較対象それぞれから等しく距離をとって検討しうる視座は存在しない。それはいわゆる神の視点であり、人間存在はその外に出ることのできない自文化のなかから異文化をまなざすほかないのである。文化と文化のあいだは、眼前にあるふたつの事物のあいだと同じ仕方ではけっして現れず、両者がどのくらい離れているのかを物差しで測ることもできない。こうしたことについて谷徹は『間文化性の哲学』(二〇一四)の序文で次のように述べている。

自文化と異文化は、左右対称にではなく、非対称的に現われてくる。それは、そもそも「間」が、文化人にとって、等質空間ではなく、自文化を中心にした遠近法ないし傾斜を含んでいるからである。しかも、自文化は、異文化との「対比」においてはじめてことさらに(理解しやすい、なれたものとして)現われるのであり、それ以前はむしろ現われていない。この意味では、「間」は、「現われ」の先後関係を、常識とは逆にするような遠近法的・傾斜的構造を持っている。

それぞれの文化は確固たる同一性を有するものとしてあらかじめ定立されているのではなく、その差が際立つことによってはじめて自文化が自文化として意識され、その同一性がかたちづくられていく。そうであれば、日本文化、アメリカ文化、イギリス文化などというものが最初から安定的に存在しているわけではないということが分かるだろう。各文化に内在する視点から他

なる文化へと視線を向けつづけることで、同質性や異質性について考えることのできる準-安定的な基盤としての自文化が形成されるのだ。要するに、文化は相互に外在的でありながらも、あいだとしての差異の現れによって影響を与えあい、たえずその同一性が問われるべきものなのである。

しかしながら、以上の見方はあくまでも互いにまなざすことのできる相互視覚体制のうえに成り立っている点で注意が必要であろう。自文化は私にとって馴染(なじ)み深く安心するものであり、異文化は私をわくわくさせると同時に不安にさせるものである。両者は私にとって対等なものとして現れてはこないが、異文化の側からこちらを見る場合にも同じ状況が生じているはずだ。谷の言葉を借りれば「傾斜的に「うつしあい」ながら、それぞれの文化はそれぞれに文化する」。ところが、この「うつしあい」が通用しない文化があるとすればどうだろうか。より(2)ゲンミツに言えば、それは一個の文化としての同一性をもたず、視覚体制のうちで見られることからも逃れていく何かである。自文化とそうしたものとのあいだには言うまでもなく(ア)「うつしあい」の関係は築かれず、事物と事物のあいだとも、文化と文化のあいだとも異なる隔たりが生じている。いまだ文化として実体的には存在していない文化ならざる何かに、思考はいかなる方法で接近していけばよいのだろうか。

この問題に取り組みつづけた思想家として、リュス・イリガライの名を挙げることができる。精神分析、哲学、言語学、フェミニズムなどの幅広い教養にもとづき自身の思想を展開したイリガライは、七〇―八〇年代に発表した著作によって世界的に知られることとなり、作家エレーヌ・シクスーとともにエクリチュール・フェミニンと呼ばれる思想潮流の代表格と見なされている。その彼女が一九九〇年に発表した『差異の文化のために』では、日本文化、アメリカ文化、イギリス文化といったかたちで複数個の文化を定立して比較することができないような別の文化の問題が提起されていた。それは普遍的かつ覇権的な唯一の文化しか存在しないとされてきたために、当の文化が否定し忘却してきた文化未満の何かを、イリガライの言によれば「いまだ存在していない性的なものの文化」を、いかにして思考するかという問題である。

性的な文化の後退に伴い異なる諸価値が確立される。それらは俗に言う普遍的な諸価値だが、人類の一方が他方を支配する

ものとして、この場合は男性の世界が女性の世界を支配するものとして現れる。〔…〕なかでも明らかにしなければならないのは、私たちがもっぱら男性的な系譜のシステムに従って生きているということだ。

同書において「文化」は、さまざまな国家や地域、社会集団、各時代に特有のものというよりも、通常の意味での文化に広くツウテイ(3)する特徴を言わんとするために用いられている。ここでは後者の意味での文化が男性的原理に貫かれているにもかかわらず、あたかも性を帯びていないかのように、普遍的な人間性を示しているかのように受け取られてきたことが指摘されている。こうしたことは特定の時代や地域に限らず、いたるところで何世紀にもわたってくりかえされてきた。無性を装う男性文化は、人々の生き方や考え方を規定したり、性的存在としての人間間に序列を設けたりすることで、現代においても支配的に振る舞いつづけている。

生き方はもちろんのこと、それが思考をも左右しうるのであれば、必然的に「文化の父権制的生成は〔…〕言語の奥深いエコノミーのなかにも印づけられている」。イリガライは口語表現をはじめ、哲学や思想、神話や科学などの言説一般もまた男性文化に従属してきたと批判する。たとえばフランス語ではある集団のなかに一人でも男性がいれば、女性の人数のほうが多くとも「彼ら」と男性形の三人称複数を用いることが規則によって定められている。哲学においてもピタゴラス派の対比表では女性の地位が男性よりも低く設定されており、そうした価値観は後世の思想にまで影響を及ぼしてきた。そのため「性的差異という規定は、私たちの文化と言語の規定に明らかに結びついている」のだが、男性文化が性別のない普遍性へとみずからをすり替えたことにより、(イ)人々はその外を知ることなく、男性文化のなかだけを生きてきたのである。

その意味で、イリガライの言う「性的な文化」が文化として成立していない状態で築かれた人間＝男性＝無性文化は、そもそも他の文化と「うつしあい」の関係を結ぶことがなく、それのみが唯一の視覚体制としてクンリン(4)することとなる。同時にそれは男性原理に支配された言説空間をも生み出し、女性的に語ることや書くことはロゴスではないものとして放逐された。したがって、『うつむく眼』(一九九三)でマーティン・ジェイがいみじくも述べていたとおり、視覚中心主義とロゴス中心主義、さらには

ファルス中心主義に対する三つの批判が、イリガライにおいては重なっているのである。

それでは、かつて存在したことのない「性的な文化」、こう言ってよければ女性的なものの文化はどこに消えてしまったのか。同じく『差異の文化のために』でイリガライは、生物学者であり「精神分析と政治」グループのフェミニストでもあるエレーヌ・ルーシュから胎盤の構造についての説明を受けた後、これをひとつのフィギュールへと練り上げ、それを用いて現在の文化の在りようとその倫理のなさを非難する。

> 女性の身体は、その組織のひとつが病気もせず、拒絶もなく、死ぬこともないままに、自己のなかで他者が成長していくことを容認する、あの特性を呈している。それなのに、ああ！　他者を尊重するこのエコノミーの意味を、文化はほとんど反転させてしまった。盲目的にも、文化は母－息子関係を宗教的なフェティシズムにいたるまで崇拝してきたが、この関係が表す、自己のなかにある他者および自己とともにある他者への寛容のモデルを解釈してはこなかったのである。

ルーシュによると、(ウ)胎盤は母体が胎児を他者として認識するのを妨げているわけではなく、むしろ母体とは異なる非自己としての認識のうえに成り立つ自他の交渉の場として機能している。イリガライはそのような胎盤の生物学的性質を踏まえたうえで、これを男性文化批判の文脈における戦略的なフィギュールへと変奏し、自己に内在する他者を省みるよう強く促す。言い換えれば、唯一の文化として覇権を握っている男根ロゴス視覚中心主義的な自文化には、まさしくズレを孕んだまま他なる文化が宿っていると言うのである。女性的な文化はここに隠れていたのだ。

男性文化は、そんなことはありえないと、女性文化を完全に外在するものと見なしているのかもしれない。しかしイリガライは、その外へと抜け出すことのできない自文化の内側に踏みとどまりながらも、男性的原理とは異なる原理を、つまりは女性的な原理や言葉の可能性を模索してきたのである。それは(エ)自文化のうちに潜む異文化を探し当てようとする思考の身振りにほかならない。

（横田祐美子「空気に触れる眼――イリガライと触覚的視覚」による）

（注）○エクリチュール・フェミニン――二十世紀後半のフランスフェミニズムにおける「女性的に書く」ことを模索する思想潮流。

○ファルス――男根、男性器。　○フィギュール――形象、表象、修辞などの意。

問㈠　傍線の箇所(1)(2)(3)(4)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問㈡　傍線の箇所㈠「『うつしあい』の関係」とは、どのような関係か。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問㈢　傍線の箇所㈡に「人々はその外を知ることなく、男性文化のなかだけを生きてきた」とあるが、それはなぜか。本文の内容に即して五十字以内で説明せよ。

問㈣　傍線の箇所㈢に「胎盤は母体が胎児を他者として認識するのを妨げているわけではなく、むしろ母体とは異なる非自己としての認識のうえに成り立つ自他の交渉の場として機能している」とあるが、イリガライがルーシュのこうした認識に注目するのはなぜか。本文の内容に即して七十字以内で説明せよ。

問㈤　傍線の箇所㈣「自文化のうちに潜む異文化を探し当てようとする思考の身振り」とは、どのようなことか。本文全体の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

二　次の文章を読んで問いに答えよ。

冬になると、三輪田屋からパンがとどくことが多くなる。

ガラス棚にむき出しで並んでいた菓子パンは、次の朝にはすっかり固くなっていて、もう売り物にはならない。それを祖母のきぬは何個かわたしてくれるのだ。

この頃特に寒い日が続いていて、パンは売れ残るようだ。母のとく子が釜のふたをとると、必ずといっていいほど湯気の下に四角や丸いかたちの菓子パンが見える。炊き上がったばかりの飯の上にほうりこまれたパンは、飯がむれる間にやわらかく熱くなって、槇子はこれがなによりの好物だった。

飯粒だらけのパンを割ると、中から舌が火傷しそうな餡やクリームがとび出す。舌の先でちょろちょろとそれをなめると、世の中でこれほどおいしいものがあるだろうかと思うほどだ。中でもジャムパンには目がない。今も兄の圭一が目をそらした隙に、二個めをすばやくつかんだばかりだ。

「ちゃんとご飯も食べなきゃ駄目だよ。そんなにパンばっかり食べてちゃ大きくならないからね」

とく子が味噌汁をよそいながら言う。甘い大根のにおいが流れてきて、槇子はそちらにも心を動かされた。おまけに今朝の味噌汁には玉子が入っているらしい。母が〝本家〟とよぶ隣りの三輪田屋では、きぬも叔母の良江もみんな玉子を落とした味噌汁を飲む。けれども槇子の家では玉子入りは三日に一度だ。

「うちは貧乏だから、毎日玉子を食べられないんだろうか」

槇子は食べかけのジャムパンを持ったままふとそんなことを思った。時々母が祖母に小声で話しているのを耳にする。

「こんなにお金がなくて、子どもをこれからどうやって育てていこうかと思って……」

槇子はこたつの向こう側の父親を見た。二人の会話はその後こう続くのだ。

「もうちょっと、うちの人がなんとかしてくれるといいんだけど」

「源吉は駄目だ。あれは本当に駄目だ」

祖母のきぬは叫ぶように言った。実の娘のグチをもう続けさせないほど、それはきっぱりしたものだった。娘婿をかばっているのではない。これ以上源吉の話をするのに祖母はたえられないようなのだ。

祖母が父親を嫌っているというのは、ずっと前から槇子にはわかっていた。

「マキはあんなお父さんで可哀相だな。な」

そう言ってきぬは槇子の頭をよく撫でる。そしてその後で売りものの飴か小銭を必ず握らせてくれるのだ。祖母からもらうものにはいつもうっすらと漢方薬のにおいがついていた。そしてそんな硬貨を掌に置くと、槇子は本当に自分が哀れな少女のように思えてくる。自分がよくわからないところで、とてつもなく大きな不幸が存在しているような気がするのだ。

新聞から目を離さずに父は箸をとった。どうやら玉子は父の味噌汁にだけ入っているようなのだ。祖母が言うさまざまな「可哀相な」ことの元凶なような父に、母はいつもこうして遇している。そしてそのことがよく槇子を混乱させるのだ。(ア)

「お父さんを恨んじゃいけないよ」

とく子は時々そんなことを言う時があった。

「みんな戦争がいけないんだからね」

小学校の近くの下駄屋のおじさんは片目がつぶれている。なんでも戦争に行って鉄砲にうたれたそうだ。父の源吉は両手も両足もぴんぴんしている。それなのに母はどうしてそんなことを言うのだろうか。

「からだが元気だって、戦争にやられてたことだってあるんだから」

もっとわからない。それに祖母や叔母がせつなげに言うほど、槇子は自分のことをそう可哀相だとは思っていないのだ。母はしょっちゅうちは貧乏だとこぼすけれど、本当にそうだろうか。玉子は毎日食べられないけれど、着るものも持っているものも他の友人に比べて決して見劣りしない。それどころか、槇子の洋服はこの田舎ではめったに見られないほどしゃれていると皆

に言われる。

それは東京に住んでいる母の親友が譲ってくれたもので、そこの家には槇子より二つ年上の少女がいるのだ。もう着れなくなったワンピースやスカートを、そこの家ではよく小包みにして送ってくれた。ラシャでつくられたフレアースカートも、プードルの模様のブラウスもどれも新品のようだった。

これを着ていた少女に、槇子はいっぺんだけ会ったことがある。電車をいくつも乗りかえたところにその子の家はあって、きみどり色のマサキがまわりをとりまいていた。ピカピカ光るガラス窓や、レース編みの椅子カバーというのはいかにもこざっぱりとしていて、槇子はかなり居心地の悪い思いをしたものだ。槇子の住んでいる町では、こういう家は医者を父親に持つ友人の家と限られている。遊ぶ時もなるべく避ける場所だ。

少女は想像していたよりも可愛くもなければ、そう都会っぽいこともなかった。ただピアノを弾けることが槇子をおじけづかせた。そのピアノの上にも、椅子と同じ柄のレースがかかっていて、少女はいかにもものなれたようにそれをめくったのだ。

「本当は人さまにお聞かせするほどうまくないのよ。だけど少しはやる気を出してくれなくっちゃ」

歯切れいい言葉をつかう少女の母親は、薄い藤色のカーディガンを着ていて、それはとても綺麗だった。母のとく子の方がずっと年上に見えると槇子は思ったほどだ。

紅茶を飲んだ後、少女は槇子を自分の部屋によんでアルバムを見せてくれた。まだ小学生なのにみんなセーラー服を着ている。少女はある私立の学校の名を得意気に告げたが、槇子にはわからなかった。

とはいうものの、その家を辞す時、槇子の胸の中に羨望が生まれたのは本当だ。いつまでもしつこく吠え続けるスピッツに(1)閉口しながら門を出た後、槇子は言った。

「あのうち、きれいだね。あんなうちいいね」

「槇ちゃんだって――」

母はなぜかその時薄く笑っていた。

「あのうちの子みたいになれたんだよ」
「嘘だ」
胸が怖いものを見た時のように早い動悸をうちはじめるのがわかる。
「本当だよ。お父さんが戦争から帰ってきてちゃんと元の会社に勤めてたら、槇ちゃんだって、お嬢さんっていわれてたよ」
それ以上聞きたくないと槇子は思った。わけもわからない悲しみが襲ってきて、槇子は不意に涙ぐみたくなったほどだ。
「槇ちゃんは本当に運が悪いよ。ついていないんだよね」
とく子は何度も唱うようにつぶやき、その言葉は自分自身に向けられていることはすぐにわかった。なぜならとく子は、槇子を見つめることもせず、住宅地の空をゆっくりと染めていく夕焼け空を眺めていたからだ。
「運が悪い」というのがどんな状態をさし、どんな人々をさしているのか、槇子にはほとんどわからない。けれどもそれを口にする時の、おとなたちの表情ははっきりと思い出すことができる。そしてそれは槇子の大嫌いなものだった。なぜなら「運が悪い」と、父の悪口はいつも共に存在しているものだったからだ。
「姉さんは運が悪いんだよ。あんな亭主だったら、私お嫁にいかなくたっていいよ」
そう言うのは叔母の良江だ。とく子とは十近く年が離れている妹で、もう三十歳をすぎている。この町の女の中で、いちばん早く車の免許を持った良江は、毎日のようにライトバンを乗りまわしていた。良江があんなふうに男のようなことをして、いつまでも結婚しないのは、きぬが三輪田屋を継がせたがっているからだと皆が噂している。長男の実は、良江よりもふたつ上だが、東京の私立大学を六年かかって卒業した後、弁護士をめざすという名目で職についていない。すでに妻がいながら、今だに仕送りを受けているのだ。
「三輪田屋の総領は、どうも出来が悪いらしい」
(2)
と口さがない人々は言っているらしいのだが、きぬはほとんど盲目的に息子のことを信じていた。早くして未亡人になった後、老舗の菓子屋をここまで持ちこたえてきたきぬも、こと息子のことになるとこれほど甘くなるものかとまわりの人間を辟易

させた。

「実の勉強を続けさせるために、わしゃ三輪田屋のひとつやふたつ潰れたって本望でごいす」

そう言ってきぬは、もう曲がりかけた腰をひょいと伸ばすのだ。

「それにしても」

ときぬは言う。

「とく子の運のないこと。あの婿だけはわしの見込み違いでしたわ」

そういう時のきぬは、いかにも口惜しそうに唇をゆがめるのだ。

「あれはいつの頃だったかねえ」

母親のとく子が、ゆっくりとゆっくりと喋り出したことがある。槇子と一緒に昼寝をしている時だ。母の声はゆっくりと低く、それはまるで子守唄がわりのおとぎ話のように聞こえた。

「お父さんが戦争から帰ってきてすぐのことだったっけ。三年も収容所に入れられていたから、帰ってくるのが遅くてね。私もひょっとしたら死んでいるかと思ってた。だから無事で帰ってきた時、お婆ちゃんはそりゃ喜んでね、親戚中集めて毎日宴会だよ。春のことでね、お父さんは筍ご飯が大好きだっていうんで、お婆ちゃんはさっそく炊いたんだよ。そしたらお父さん、何杯食べたと思う。どんぶりに四杯だよ。お婆ちゃんは鬼みたいに怒ってね。限度っていうもんを知らない、育ちが悪いってカンカンになったんだよ」

そしてクスッと笑った。

「筍ご飯をどんぶりに四杯だよ。あんなに痩せたからだのどこに入ったかって思ったよ」

あの時、どうして母はそんなことを言い出したのだろうか。やっぱり父のことが話題になっていたからに違いないと槇子は思う。

母の傍には、きぬ、良江、そしてお手伝いの信代が横たわっていた。

真夏になると、店番を誰かにさせて、順番で午睡をとるのが三輪田屋の習慣だった。いつもは水飴を瓶に詰めたりする露地横の部屋は格好の場所だ。天井が高いから、風がたっぷりと吹いてくる。そこに女たちは思い思いのくつろいだ姿勢でまどろむのだ。

竹で編んだ箱枕を手離さないのはきぬで、使っても使わなくても右手には必ずうちわを持った。良江はタオルを首にまいて、最後には目にあてたりする。

三輪田屋の女たちは大柄なのが特徴で、明治生まれのきぬも背が高い。とく子も良江もむっちりと肉がついていて、色が白いからなおさら目立つ。食べ物には奢る家だったから、お手伝いの信代も年頃の娘らしいやわらかい線のからだになっていた。

暑さのために三人の女たちは、スカートを太ももまでまくり上げていた。特に見事なのは良江で、隙間のない太ももは汗でかすかにぬめり光って見える。蠅が何度かそこに止まっては、ピシャンと叩かれた。

「今年は蠅が多いねえ」

良江が天井を眺めながら言った。三輪田屋は食べ物商売ということもあって、いたるところに蠅取りリボンをつるしている。

槇子はよくそこにひっかかって、髪を蠅の死骸ごとべたべたに汚してしまうのだ。

「源ちゃんに――」

良江は義兄のことをそんなふうに呼んだ。

「いっぺん溝をさらってもらえばいいんじゃない」

「ここんとこ忙しいんだよね。毎晩帰ってくるのが遅いし、寄り合いが多いし……」

目を閉じて眠ったふりをしながら、母はきぬや良江の前に行くと、どうして声が小さくなるのだろうかと槇子は思った。

「源ちゃん、この頃『浜よし』に行ってるみたいだね。毎晩来ちゃ、二合とっくりふたつあけてくっておばさん言ってたわ」

「みっともない」

はき捨てるように言うきぬの声がした。

「まるでうちで飲ましていないみたいじゃないか。あんた、そんなことはないんだろ」
「用意はあるけど、うちで飲むのはあまり好きじゃないんだよね」
「甲斐性もない癖になにを言ってるんだか。外聞が悪いから、あんまりよそで飲ませるんじゃないよ」
そして三人の女は、ひそひそと源吉についてのさまざまなことを口にした。からかい、いらだち、不信、そして否定がとぎれとぎれに槇子の耳に入ってきた。「外聞が悪い」というのを、数回きぬは言った。それはきぬの口癖だったのだ。
女たちの話はいつしかとぎれとぎれになり、そして健康的な寝息へと変わっていった。槇子は聞き耳をたてるのを途中からやめていた。こんな時の母を嫌いだと思う。きぬや良江はもっと嫌いだと思う。それなのに、こうした女たちの午睡の輪から脱け出すことはもっと嫌なのだ。だから槇子はいつもこんな時、(イ)長い間眠っているふりを続けなければならなかった。

父の源吉をみなが美男子だというが、槇子はよくわからない。
頬のあたりがそうきつくない直線を描き、目は大きな二重だ。上睫毛より下睫毛の方がずっと長い。昼寝の時などきぬは、
「男の目は糸をひけって、昔の人はうまいことをいったもんだ。源吉みたいな目の男は、ありゃ甲斐性なしのしるしだね」
とよく言う時があって、それで槇子は父の顔をあまり好きになれないのかもしれない。源吉の顔はそのまま兄の圭一に受けつがれているらしく、小学校五年生の圭一は、女の子たちにとても人気があるのだ。
「ふつう女の子は父親に似るっていうけどうちは反対だね。槇ちゃんもお父さんに似ればよかったのにね」
とく子はそんな時、妙に華やいだ声を出した。槇子は一重のややねむたげな目と、がっちりとした鼻を持っている。それはとく子、きぬ、良江に共通しているものだ。
長い間、槇子はどうして源吉ととく子が結婚したのだろうかと考えあぐねていたところがある。二人は仲のよい夫婦とはいえなかったし、実家の三輪田屋で、きぬたちと喋り合う時のとく子は、自分の夫のことを好いているとはとうてい思えなかったのだ。

教えてくれたのは良江である。

「槇ちゃんのお父さんとお母さんは、すごい恋愛結婚だったんだよ」

槇子はそう驚かなかった。よく思い出してみると、ごく幼ない頃から、三輪田屋のお手伝いたちがニヤニヤしながら槇子にいろいろ吹き込んだ憶えがある。

「二十歳の頃、お姉さん、東京の女専に通っててさ、そこであんたのお父さんと知り合って夢中になっちゃったんだよね。あの頃は槇ちゃんのお父さんもパリッとしててさ。大学出たての会社員だったんだもの。戦争がなかったらヨーロッパかどこかの支店に行くはずだった。本当だよ。今みたいになるなんて、誰も考えなかったよねえ」

この話をとく子は槇子にしたことがない。ただ時々思い出したように、

「戦争さえなかったらねえ……」

とつぶやくだけだ。戦地から遅れてもどってきた源吉は、そのまま三輪田屋の離れにころがり込んで、(ウ)いつのまにか「源ちゃん」になってしまったのだ。

地元の商工会議所に勤めている源吉は、たいてい外に飲みに行っているか、そうでなければなにかを作っていた。なにかというのは玩具だ。本当は画家になりたかったという源吉は手先が器用で、さまざまなものをつくった。

ぜんまい仕掛けでかたこと動きまわる郵便配達の人形。てこを利用していつまでも器械体操を続けるキューピーもあった。源吉は自分の手におえないものがあると、設計図を持って知り合いの大工の家に行き、おおまかなかたちをつくってもらう。そしてその後、自分で丁寧にニスやペンキを塗るのだ。

本来なら子どもとして、父親のそんな習癖は大いに喜ぶべきことだっただろうが、槇子も圭一も、父の作る玩具など触れたこともない。なぜならそこにたまらなくエゴイスティックなにおいをかぎとっていたからだ。

源吉は自分が楽しむだけのためにさまざまなものをつくっていたのだ。人形の顔はどこかいびつだったし、ちょこまかとした動きには、どこか拗ねたようなところがあった。子どもが手にとりたくなるような愛らしさはあまりない。

源吉は時々ふっと東京に出かけ、大きな包みをかかえてくる。それは田舎では見たこともない新しいおもちゃばかりだ。

「圭一が喜ぶだろうと思って」

必ず源吉はそんなことを言ったが、たいていは自分がいじっていた。それらの高価な品物を父が買ってくるために、とく子がどれほど苦しい思いをしているか槇子はよく知っていた。父がいない昼間は、とく子は三輪田屋に手伝いに出ているのだ。

「いつのお正月だったっけねえ」

とく子が思い出すように言った。

「猪年の時だったけど、お父さんが張子で大きな猪をつくったのさ。二日徹夜してね、絵具で『謹賀新年』って大きく描いた。それを元旦の日に三輪田屋の店先に飾っておいたのさ。そしたらお婆ちゃんがそれをこわしてね、大きな声で言ったんだよ。あれ嫌だよう。正月そうそう、どっかの子どもがこんないたずらをして、大きなゴミをこんなとこに置いてって……」

「お婆ちゃん、それがお父さんのつくったものだって知ってたの?」

「もちろん知ってたさ。その後何度もしつこくね、まさか大人ならこんないたずらはしないさね。こんな紙でつくったゴミをつくるはずもないさねってあたりに聞こえるような大きな声で言ったんだよ」

「えーっ。でもお父さんかわいそうだよ」

「そんなことないよ。紙でつくったあんなものをつくる方がいけないよ。お婆ちゃんはああいうものがいちばん嫌いだからね。もし飾りつけに必要なものがあれば、どこかの店でちゃんとしたものを買えばいいんだよ」

源吉は自分のつくるものが、三輪田屋の女たちの嘲笑の的になっているのをよく知っているらしく、時々こんなことを言った。

「おもちゃっていうのは、一発あてればドカンともうかるんだ。今にみてろよ、日本で大流行するようなもんをつくって家を建ててやるからな」

本気で言っているのか、そんな時の源吉は目尻が上がり口元が少しゆるんだ。そしてそんな父の顔を槇子はとても卑(エ)しいと

思ったりしたのだった。

（林真理子「玉呑(たまの)み人形」による）

（注）○女専――旧制女子専門学校。学校教育法施行以前に、中等教育を修了した女子に対して専門教育を行っていた高等教育機関。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)の語句の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「そのことがよく槇子を混乱させるのだ」とあるが、なぜ槇子は「混乱」するのか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「長い間眠っているふりを続けなければならなかった」には、槇子のどのような心情が表れているか。本文の内容に即して七十字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「いつの間にか『源ちゃん』になってしまったのだ」とあるが、これはどういうことか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「そんな父の顔を槇子はとても卑しいと思ったりしたのだった」とあるが、このとき、槇子はどのような心情だったと考えられるか。本文全体の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

三　次の文章を読んで問いに答えよ。

とかく歌は人の情さへ変はり行けば、それにつれて変はり変ずる、これいやといはれぬ天地自然の道理なり。しかるに上古は人の心素直にて、偽り飾ることなければ、歌も己(ア)れが分量を出でず。その身の上にて思ふことを、ありのままに詠み出でしものなり。されば上古の歌は、実にして、天子の歌は天子の身の上のこと、公卿百官はそれぞれの公卿百官の身の上のこと、民百姓は民百姓の身の上のことを詠みて、よく分かるるなり。しかるに世段々末になり、後世になるほど、人の心偽り多く、思ふことをありのままにもいはぬ、繕ひ飾るやうになりゆくに随ひて、歌も又偽り多く、思ふことの(1)ありていにはあらぬやうに、段々なり行くに随ひて、上たるものの詠みたるも、下たるものの詠めるも、分かれがたく混じ行くなり。これを深く考へぬ人は、和歌の衰へ行くと思ふは誤りなり。これ又かの人の心の偽り多くなり行くに連るるものなれば、又いやとも如是なり行くはずの自然の道理なり。もし今の人の詠む歌も、古の如く思ふことをありのままに詠み出でば、これ今の人情に違ひて、自然にあらずと云ふべし。今は人の心偽り飾ること多ければ、歌も又偽り飾ること多きが、即ち人情風俗につれて変易する、自然の理に叶ふなり。(イ)さればこの人の情に連るると云ふことは、万代不易の和歌の本然なりと知るべし。

されば今の世にて、この道に携はり、和歌を心懸くる者は、とかくまづ今の人情に随ひて、偽り飾りてなりとも随分古の歌を学び、古の人の詠じたる歌の如くに詠まむ詠まむと心懸くれば、その中におのづから、平生見聞する古歌古書に心が化せられて、古人のやうなる情態にも移り化するものなり。その時はまことの思ふことを、ありのままに詠むと云ふものになるなり。これ何ぞなれば、かの古の歌の真似をして、飾り作りて詠み習ひ見習ひたるその徳ならずや。これ(ウ)和歌の功徳によりて、我が性情もよく化すると云ふものなり。然るを「後世の歌は偽り飾りてまことに非ず。上代の質朴なるが実情なり」とて、今の世にても思ふことをありのままに詠み出でたらば、(2)えもいはれぬ見苦しき歌どものみ出で来べし。今の人情の偽り多きを悪みながら、その情をありのままに詠めとは、如何なる心得違ひぞや。予が教ふるは、大いにこれに異にして、この裏なり。予が教ふるは、今の偽り多き情のままに、その情にて昔の人の真似をして詠み習ひて、さて古の人のやうに自然に化するなり。これ大なる氷炭の違

ひなり。よくよく考へ思ふべし。今の歌の偽り多きを悪まば、その作者の心の偽り多きを戒むべし。さてその作者の心をば、何を以て偽りなきやうに直すべきぞ。ただ古の実情の歌どもを、平生取り悩み扱ひて、それに習ひ染みて、その古歌の情になるやうにすべし。さて少しづつにても、古歌の情に吾が情も習ひ移れば、その時には今詠む歌も、誠の古のやうなる実情なるべし。然るを「今の歌は誠の情にあらず。みな情を曲げて作り飾れるものなり」とて、妄りに譏り憎むは、(エ)本末を弁へ知らざる者のことなり。可笑、可笑。

（本居宣長『排蘆小船』による）

問(一) 傍線の箇所(1)(2)の語句の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「己れが分量を出でず」とは、どういうことか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「さればこの人の情に連るると云ふことは、万代不易の和歌の本然なりと知るべし」を口語訳せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「和歌の功徳によりて、我が性情もよく化する」とあるが、具体的にはどのようなことか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「本末を弁へ知らざる者のことなり」とあるが、筆者はどのようなことを批判しているか。本文全体の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

四

次の文章を読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

張斉賢為(1)布衣時、倜儻有大度。孤貧落魄、常(2)舎道上逆旅。有群盗十余人、飲食於逆旅之間、居人皆惶恐竄匿。斉賢径前揖之、曰、「(a)賤子貧困、欲就諸大夫求一醉飽、可乎」。盗喜曰、「秀才乃肯自屈、何不可者。顧吾輩麤疎、(b)恐為秀才笑耳」。即延之坐。斉賢曰、「盗者、非(ア)齷齪児所能為也、皆世之英雄耳。僕亦慷慨士、諸君又何間焉」。乃取大盌、満酌飲之、一挙而尽、如是者三。又取狙肩、以指分為数段而啗之、勢若狼虎。群盗視之愕眙、皆咨嗟曰、「(c)真宰相器也。不然、何能不拘小節如此也。他日宰制天下、当念吾曹皆(イ)不得已而為盗耳。願早自結納」。

競以金帛遺之。斉賢皆受不讓、重負而返。

（司馬光『涑水紀聞』による）

（注）○張斉賢――北宋時代前期の政治家。　○倜儻――物事にこだわらないこと。
○竄匿――逃げ隠れる。　○揖――挨拶する。　○秀才――知識人に対する敬称。
○麤疎――粗忽。　○齷齪――心が狭いさま。　○大盌――大きな碗。　○豘――豚。
○愕眙――おどろき目を見張る。　○咨嗟――言葉にならない感嘆の声を上げる。
○結納――親交を結ぶ。　○金帛――黄金と絹布。財物を指す。　○重負――重い負担、重荷。

問(一)　傍線の箇所(1)「布衣」、(2)「舎」、(3)「遺」の意味を記せ。

問(二)　傍線の箇所(ア)「乃肯自屈」、(イ)「不得已」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。

問(三)　傍線の箇所(a)「賤子貧困、欲就諸大夫求一酔飽、可乎」を口語訳せよ。

問(四)　傍線の箇所(b)「恐為秀才笑耳」を口語訳せよ。

問(五)　傍線の箇所(c)に「真宰相器也」とあるが、盗賊たちはなぜそのように考えたのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。